

あなたの愛など要りません 2

シャルマン

ヘンドリックと
キンバリーの父。

ミ

ヘンドリックと
アリーの娘。

ミルドレッド

ラシエルと
キンバリーの娘。

キンバリー

ヘンドリックの弟。
人望が厚く、
ひたむきに励む努力家。
後にラシエルと結婚する。

アリー

ヘンドリックの「真実の愛」の相手。
貧民街で育ったせいか、
生きることへの執着が強い。

登場人物紹介

CHARACTERS

ヘンドリック

バームガウラス公爵家の当主で、
王国騎士団長を務める。
ラシエルと結婚するが、
運命の相手である
アリーだけを愛している。

ラシエル

真面目で一途な伯爵令嬢。
長年の片思いの相手、
ヘンドリックと結婚するが、
とある事件をきっかけに
命を落としてしまう。
しかし、目を覚ますと
時間が遡っていて……

ランスロット

ラシエルとヘンドリックの子ども。
バームガウラス公爵家の次期当主として、
英才教育を受ける。
誠実で愛情深く、純粋な心の持ち主。

プロローグ

『これはまた、ずいぶんと数奇な運命さだめのもとに生まれ落ちた嬢ちゃんだねえ』

——異国の衣装を纏う老婆は、私の顔をじっと見つめた後に、そんな言葉を呟いた。老婆の琥珀色の瞳には、不思議そうに首をかしげる七歳の私ラシェルが映っていた——

旅芸人一座が、シュリンゲン伯爵邸の広い庭の中央に、簡易舞台を設置している。

手慣れた様子で太い木枠を組み合わせ、その上に長くぶ厚い平板を並べ、周囲に色鮮やかな布を張り巡らす。あつという間に華やかな舞台のできあがりだ。

伯爵邸の手入れの行き届いた落ち着きのある庭の中に、ぽつんとできた旅芸人の華やかな舞台。

珍しい光景に、普段は忙しく働く使用人たちも、しばし足を止めて視線を向ける。

私——ラシェル・シュリンゲンも、もの珍しさに惹かれたひとりであった。

シュリンゲン伯爵家当主であるお父さまから『むやみに側に寄ってはいけないよ』と朝一番で言われた注意を忘れ、できあがったばかりの舞台の周りを、好奇心いっぱいに見て回る。

我慢なんてできっこない。

だって、お父さまは今日、私の七歳の誕生日のお祝いとして、巷^{ちまた}で人気の旅芸人の一座を伯爵邸に呼んでくれたのだから。

国々を回って披露しているという旅芸人たちの芸は、異国情緒がたつぷりで、歌も踊りもどれもこれもが珍しいと評判らしい。

中でも、目玉は異国の楽器を用いての演奏。この国にはない楽器が多く、奏でる音色はどこかもの悲しく、聴いて思わず涙を流す人も多いのだとか。

珍しい楽器とは、どんなものなのかしら。

今日はどんな曲が聴けるの？

私も曲を聴いたら泣いてしまうのかしら。そしたら、きっとお父さまは大慌てね。

そんなことを思いながら、私はうきうきと舞台裏手に回り込む。

お父さまは音楽にさほど興味がなければ、お母さまとお兄さま、そして私は音楽が大好きだった。時折^{おやこ}母子で家庭内演奏会を楽しむくらいに。

まだ一歳半の妹は参加できないけれど、私たちの演奏を嬉しそうに聴いているから、あの子もきっと音楽好きのはず。もう少し大きくなったら、一緒に楽しめるだろう。今からその日が来るのを楽しみにしている。

そんな私にとって、今日、呼び寄せてくれた人気一座というプレゼントは、とても心躍るものだった。

「わあ……っ」

庭と舞台を仕切る幕を持ち上げ、目にした光景に、私は思わず感嘆の声を上げる。

これから使うのだらう珍しい楽器がたくさん置いてあったから。

自国のものとは少し形の違う豎琴、妙に細長い縦笛、筒を連ねてひとつにまとめたものも笛なのかしら。

他にもくねくねと曲がったパイプのようなものや、板をたくさん並べたものもある。

あれは何これ何、と見ながらどんどん奥に進んでいく。私はすっかり夢中になっていた。

「嬢ちゃん音楽が好きなのかい？」

思いもしないところから聞こえてきたしわがれ声に、私は驚いてぴくりと体を揺らす。

声のしたほうに顔を向けると、舞台裏の端にちょこんと座る老婆の姿があった。

異国の衣装だろうか、この国では見たことのない形状の衣服を纏う彼女が、にこにこ目細めて私を見ている。

頭に布を巻きつけて髪はほとんどは隠れているけれど、ひと房はらりと落ちる前髪は真っ白にこやかな顔の目じりや口元には深い皺が刻まれて、琥珀色の瞳がきらりと光る。

そして、この国では珍しい浅黒い肌をしていた。と言っても、今日来ている旅芸人たちの半数はその肌の色をしているから、格別不思議には思わなかった。

「あ……」

そういえば、むやみに側に寄ってはいけないよと、お父さまに言われていたのだった。ここに来てようやく、朝方に受けた注意を思い出し、私はそろりと一歩^{おそ}後退さる。

でも、老婆はそんな私の反応を気にする様子もなく、にこにこ笑っている。

「……ええと」

その優しいな雰囲気警戒心より好奇心が勝った私は、迷った末に後退さる足を止め、口を開いた。

「おばあさんが弾くのは、この中のどれかしら……？」

所狭しと並ぶ楽器を指さし、おずおずと尋ねれば、老婆は笑顔のまま小さく首を横に振った。

「私の芸は、これじゃあないんだ」

「これじゃない？」

きょとんと目を丸くする私に、老婆は軽く肩を竦めてみせる。

「そうさ。楽器を演奏する者もいれば、歌が得意な者もいる。踊りが上手い子、曲芸を披露する子もね。力自慢で、芸の他に荷物運びを仕事にしている者もいるよ」

「じゃあ、おばあさんは、どんな芸をするの？」

「私かい？ 私のはちいっと毛色が変わっててね。先見っていう芸なんだよ」

「さきみ？ さきみってなあに？」

初めて耳にする言葉に、私はこてんと首をかしげる。

「占みたいなもんだ。相手の顔を見て、ぼんやり見える未来をちょこつと教えてやるのさ」

「まあ、おばあさんは、未来が見えるの？」

「言っただろう、ぼんやりとしか見えないよ。だから相手に教えるのも、ぼんやりした内容だ。そ

れこそ、考えようによっちゃあ、どうしても取れるくらいのね」

「それでもすごいわ！ そんなことができるなんて、まるで魔法みたい」

私が目をきらきらさせながらそう言うのと、老婆は、ふふ、と笑って目じりの皺を深くする。

「魔法ねえ。もつとずっと大昔には、そんなものが自由に使えた時代があったけど、今はすっかり廃れちゃった。偶に私みたいに、ちつぽけな能力持ちが生まれることもあるが、私の先見くらいじゃあ魔法と言うのはおこがましいさね」

そう言われても、私にとつては十分大したことに聞こえる。

「ねえ、おばあさん」

私は期待の眼差しで老婆を見た。

「私の未来はどうかしら？ おばあさんの目には、何が見える？」

「嬢ちゃんの未来かい？ そうさねえ……どれ」

老婆はふむと顎に手を当てながら、じっと私の顔を見つめる。

「おや？」

それから、ふと何かに気づいたように目を丸くする。

そうして言ったのだ。

「これはまた、ずいぶんと数奇な運命のもとに生まれ落ちた嬢ちゃんだねえ」

この後、もうじき舞台が始まるという声に、私は老婆との会話を終えて舞台裏から出て行つて。

間もなく始まった珍しい楽器の演奏や踊り、そして歌や演芸に、夢中になった。たった七歳だった私は、この日、頭の中を新しい経験ばかりで満たされて、この老婆との邂逅、そして告げられた言葉を、しばらく後にはすっかり忘れてしまう。

第一章 英雄の誕生と私

ヘンドリックさまが公証人をつれて現れ、私——ラシエルに離縁を告げた日の夜。私は私室の机の前に座り、ぼんやりと思考に耽っていた。

伯爵令嬢だった私が嫁ぎ、今日まで夫だった人の名は、ヘンドリック・バームガウラスという。短く整えた漆黒の髪と紅玉^{ルビー}を思わせる瞳。端整で、どこか野性みを感じさせる面貌は常に無表情で、笑みが浮かぶことはない。

武に秀でる筆頭公爵家バームガウラスの嫡男に生まれ、後に公爵家当主となるヘンドリックさまは、十二歳の時に王国騎士団に入り、十八歳の若さで団長の立場に上りつめた、類稀^{たぐひ}な剣術の才の持ち主である。

そして、ある功績により、王家から英雄の称号を贈られた人でもあった。

と言っても、ヘンドリックさまの功績はそのひとつに限られず、活躍は数多い。実際、私が孤児院を慰問で訪れていた際、人身売買目的の破落戸^{ならずもの}たちと遭遇してあわや攫われかけた際も、駆けつけたヘンドリックさまに助けられた。

愚かな私は、その時ヘンドリックさまに恋をした。

そして後に彼の妻となり、愛されない絶望に一度は自分を見失う。

しかし、助けられた当時の私は、未来にどんな愚かな行為をするかも知らず、かの有名な英雄ヘンドリックさまに守っていただいたと、ただただ有頂天になっていた。

それほどに、ヘンドリックさまは強く、高名な騎士だった。

ヘンドリックさまがその名を王国中にとどろかせたとある功績とは、当時の王太子殿下——現国王陛下——のお命を、暗殺者集団からお守りしたことだ。

その時、ヘンドリックさまはたったの十六歳だった。

ラウレンツォ王太子殿下は、国内の視察旅行の途中で、十数名の暗殺者たちの襲撃を受けた。それを防いだのがヘンドリックさまだ。

と言つてもこの時、ヘンドリックさまは王太子の視察旅行に同行していない。彼は、王国騎士団の『模擬遠征訓練』に参加していたから。

模擬遠征訓練——名称が示す通り、王都の外、主要街道や街から外れた僻地に赴き、一週間ほどかけて行う実戦形式の大規模な訓練である。入団五年以内の騎士たちを対象に、数年に一度実施される、王国騎士団の名物訓練だ。

事の始まりは訓練の三日目。

「隊長、大変です……っ！」

模擬遠征の訓練地内で異変が起きた。参加した騎士たちが、次々と体のしびれを訴え始めたのだ。

幸いにもしびれ以上の症状は現れず、生死に関わることこそなかったが、症状を訴える者の数は時間を追うごとに増え、医務室はあつという間に全身がしびれて動けなくなつた騎士たちで満室に。食事に当たつたか、それとも何かの病か、動けなくなる者がどんどん増え続けるせいで調査はおろか、対処も追いつかない。

「とりあえず医務室の外に毛布を敷いて、患者を休ませるスペースを作りなさい……っ！」

医師が慌てて場所確保のための指示を出す。

しかしその後も症状を訴える者が続々とやって来て、ろくに診察もできないまま、医務室の外で地面に騎士たちがずらりと並ぶ有様となる。

そんな事態が動いたのは、最初の患者が現れてから半刻ほど経つた時だ。

「東側第二区の水^{みづがめ}瓶に、この男が何かを混入しようとしているところを捕らえました」

訓練に参加していたひとりの騎士が、そう言つて黒ずくめの男を連行した。

その騎士が、ヘンドリックさまだった。

訓練責任者として同行していた隊長のひとりが、捕まえた男の所持品を調査する。すると、複数の暗器と粉末入りの小瓶を隠していることが判明。

野外での遠征訓練中だったため薬物の解析道具などはなく、ならばこの男で試せと、小瓶の粉末を男の口の中に放り込む。

「くう……っ」

数分後、男は体をぶるぶると震わせて倒れ込んだ。

意識はあるが体は動かせず、歩行もままならない。話し方も少々おかしくなっていて、全身がしびれて動けなくなった騎士たちとまさしく同じ症状。

呂律は回らなくなっているものの、話が聞き取れないほどではないため、再度の尋問が始まった。結果、男が所持していたのは致死性のないしびれ毒で、半日もすれば回復するものと分かる。

それを男は、訓練地の各所に置いてある飲料用の水瓶みずがめに入れて回っていた。

そこを、水場を警戒していたヘンドリックさまにより拘束されたのだ。

「流石だな、ヘンドリック。お手柄だ」

尋問を終えた隊長は、ヘンドリックさまを労った後、まだ無事な騎士たちを集め、毒で汚染された水瓶みずがめの位置と数を知らせ、中身を処分するように指示を出す。

騎士たちが一斉に駆け出していく中で、ヘンドリックさまだけは動かず、その場でじっと何か考え込んでいた。

「どうした、ヘンドリック」

「隊長。どうにも気になるのです。俺は、あの男が水瓶みずがめにしびれ毒を混入した意図が今ひとつ理解できない。解決した気がせず、どうにも気持ち悪くて仕方ありません」

「……ああ、それは私もだ。いつそ致死毒を盛るほうが手取り早いのに、半日体がしびれて動けなくなるだけのものを使うなんて、意味が分からない」

隊長は顎に手を当てながら、ヘンドリックさまに同意する。

「重要人物がうじゃうじゃいる王城なら、騎士の足止めに有効だろう。だが、こんな僻地で使って

何になるんだって話だよな。しかも、いちいち水瓶みずがめにしびれ毒を入れて回るなんて、手間がかかる上に実行中に見つかる危険がある。実際、お前に見つかっただろ」

「……ですが、あの男はあえてそれをやりました」

「そうなんだよな」

隊長は苛立たしげに、がしがしと頭を掻く。

「もし全員がしびれ毒にやられて、訓練で来ている騎士たちが皆動けなくなったとしても、半日すれば回復する。つまり、本格的にこちらの戦力を削ぐ気はないってことだ。だがあの男、毒の種類や入れた水瓶みずがめの数なんかは素直に喋るくせに、しびれ毒を選んだ理由を聞くとぴたりと口を噤んじまう」

「半日程度の無力化が目的……ただの時間稼ぎ……？」

そこまで話したヘンドリックさまは、大きく目を見開いて動きを止める。

「ヘンドリック？」

「……今日は、昼過ぎに王太子殿下の視察予定が入っています」

「ああ。殿下が来られる前に、しびれ毒を入れた男を捕まえられてよかった。王位継承者の御身に何かあったら、こっちの首が飛ぶところだ」

「いえ、そこではなくて」

隊長の言葉に、ヘンドリックさまは首を横に振る。

「あれは……あの毒は、殿下のもとに我々が駆けつけられないようにするのが目的だったので

は……？」

「……っ！ しびれ毒はただ私たちの動きを止めるためで、本当の狙いは王太子殿下かもしれないってことか？」

「まだ分かりません。ですが、そう考えるのが一番しっくりくるかと」

「おい、まさか……」

「確認に行ってください。この時間ならば、順調であれば森の中を進行中のはず……」

「分かった、先に行け。私は動ける奴を選んで、すぐに後を追いかける！」

隊長の言葉を背に受け、ヘンドリックさまは馬のつなぎ場に向かって全速力で走った。

その頃。

護衛たちから引き離された王太子殿下は、孤立した馬車の中、側近の侯爵令息とふたり、震えながら息をひそめていた。

この日、次の視察先である模擬遠征訓練地へ向かっていた王太子殿下は、これまでになく上機嫌だったと言う。

実は、訓練の視察は王太子殿下たつての希望で組まれた予定だったのだ。と言っても、王太子殿下は武術に長けている訳ではない。むしろ不得手だ。

でも観戦するのが大好きで、剣術大会や武術大会などの催しには予定が合う限り、いや、時には

繰り合わせてまで観覧席に現れていた。

だから、数年に一度行われる模擬遠征訓練の視察をずっと熱望していた。しかしタイミングが合わず、なかなか実現しないまま今に至る。

それが今回の視察でようやく叶ったのだ。殿下の上機嫌も当然だった。

「いやあ実に楽しみだよ」

王太子殿下は、馬車に同乗する側近の侯爵令息に、機嫌よく話しかける。

「入団以来、無敗の騎士がいるのだろうか？ 若いのに、相当な手練れだと聞いている」

「ああ、騎士団長のご子息ですね。確か……ヘンドリック殿でしたか」

「そうそう、そんな名前だ。そのヘンドリックとやらも、今回の遠征訓練に参加していると報告があったからな、余計に視察が楽しみになったのだ」

馬車の周囲は、前後左右をそれぞれ十名ずつ騎乗した騎士たちが囲みながら進んでいる。合わせて四十名の騎士が守りを固める厳重警戒態勢だ。

ラウレンツォ王太子殿下は翌年に王位継承を控える尊い御身、どれだけ厳重にしても足りないはず。けれど、行き先が王国騎士団の訓練地とあって、問題が起きてもすぐに応援が頼めると無意識に軽く考えていたのかもしれない。今日に限っては護衛騎士たちの気も少しばかり緩んでいた。

「うわあああっ！」

そんな気の緩みを嘲笑うかのよう、馬車周辺を守る騎士たちに向かって一斉に大量の矢が射かけられた。訓練地手前に広がる、小規模の森を通過しようとしたところであつた。

暗殺者集団が木の上にひそみ、馬車が来るのを待ち伏せしていたのだ。

上方から、しかも複数の方向から一斉に放たれる矢に、馬車を囲んでいた騎士たちが次々と負傷し、落馬していく。

時を置かず暗殺者たちが姿を現し、騎士たちと激しい乱戦状態に突入した。

既にこの時点で騎士たちの半数以上が負傷していた。中には重傷の者、落馬して動けない者もいる。

結果として暗殺者たちの数と大差ない状態となり、護衛隊長が「応援を求めて訓練地まで走れ」とひとりの騎士に命じる。

しかし、さらに事態は悪化する。

王太子殿下の乗る馬車を引く馬が突然いななき、暴走し始めたのだ。偶然でも、事故でもない。暗殺者のひとりが馬の尻を剣の柄で打ち叩いたことによる、故意に引き起こした暴走だった。

猛スピードで走り出した馬車を、騎士数名が追おうとするけれど、間に暗殺者たちが割って入って邪魔をする。

「くそっ、このままでは殿下が……っ！ 応援は……っ、応援はまだか！」

「はっ、滑稽だな。応援要請が届いていると思ったか」

相対する暗殺者が、騎士の嘆きを嗤う。

どういことだと目を見張る騎士に向かって、暗殺者は続けた。周囲の騎士たちにも聞こえるよう、あえて大きな声で。

「我々がむざむざ通すはなからう。どうせ要請が届いたとしても無駄だ。あちらには動ける者など残っていない」

「な、なんだと……？ お前らは一体、何をしたんだ……っ！？」

耳にした言葉に秘められた意味を想像した騎士たちは、さっと青ざめるのだった。

一方、王太子殿下を乗せた馬車は、森をかなりの距離走り続けた後によりやく止まった。

「な……何がどうなっているのだ……？」

「わ……分かりません。とりあえず今は、外は静かになったようですが……」

御者はとつくに切り捨てられ、護衛騎士たちとも遠く引き離されてしまった。

馬車の中にいるのは、王太子であるラウレンツォ殿下と、側近の侯爵令息のふたりだけ。

その侯爵令息は、騎士ではなく文官である。剣の嗜みはあるものの、あくまで嗜み、護身術程度でしかない。

それでも、武術の心得などまったくない王太子殿下よりは少しマシなのかもしれない。顔色が青を通りこして白くなった殿下は、ただふるふると震えるばかり。

せめてこのまま誰も追いかけて来なければ、とふたりは儚い望みをかけるも、遠くから暗殺者らしき足音と怒声が聞こえてくる。

しかも、それはどんどん近づいてきていた。

「……殿下。私が囹になつて引きつけます。その間にそちら側の扉からお逃げください」

死を覚悟した侯爵令息が、護身用に身に付けていた剣に手を伸ばした——その時だった。

外から突然、複数の野太い悲鳴が上がり始める。剣がぶつかる金属音、ドサツと何かが落ちるような音。

しばらく続いたそれらの音の後に、唐突に訪れたのは静寂。

馬車の中も外も、しんと静まり返って物音ひとつしない。

「……」

王太子殿下と侯爵令息は、外がどうなったのか気になって仕方ない。助かったのかもしれない、だが、なかなか動き出す勇気が出なかった。

最初に大量の矢を射かけられた時点で、馬車の窓は内側から鎧戸よろいどをはめていた。武器で窓を割られ、そこから侵入されるのを防ぐためだ。

侯爵令息がはめたのだから、外すのももちろん可能だ。そうすれば周囲の確認も簡単にできる。それでも状況が不明瞭な今、武人でもない王太子殿下と侯爵令息は、安易に鎧戸よろいどを外して外を覗く気にならない。

ガタガタと震えるふたりの耳に、ザッザッと馬車に近づく足音が聞こえる。

この先にあるのは救いか、破滅か。どうか味方であってくれと、ふたりは揃って体を固くし、息を詰め、耳を澄ました。

「王太子殿下、ご無事でいらっしゃいますか」

聞こえてきたその言葉に、ふたりはほっと安堵しかけ。

だが、すぐに気づく。耳にした声は、視察任務に同行していた騎士たちの誰とも違うと。

「……だっ、だだ、誰だ……っ？」

緩みかけた緊張が、再び車内のふたりを襲う。

声も出せず、ただ口をばくばくと開閉させる王太子を背に庇い、侯爵令息は震える手で剣を抜き、誰何した。

返ってきた答えはこうだった。

「王国騎士団長シャルマン・バームガウラスの子、ヘンドリックでございます。遠征訓練に参加しておりましたが、訓練地で異変があり、視察でこちらに向かわれる殿下ご一行の状態が懸念され、馳せ参じました。ご安心ください。殿下の馬車を襲っていた者たちはすべて切り捨てました」

「~~~~~っ！」

馬車の中、明らかに味方と分かる答えに、殿下と侯爵令息は感極まって声なき悲鳴を上げる。そして、湧き上がる歓喜の衝動のまま、バン、と勢いよく扉を開け、転がるように外に出た。

「ヘンドリック……そうか、お前が……」

凜と立つヘンドリックさまは怪我ひとつ負っておらず、けれど全身は返り血で赤く濡れていた。額や頬に飛び散る血飛沫と、純白の騎士服の肩や腕、胸元や太腿を染める鮮血は、すべて暗殺者たちを切り捨てた時に浴びたもの。

紅に染まったヘンドリックさまの背後に点々と転がるのは、既に事切れた暗殺者たちの死体。普段であれば恐怖しかもたらさない光景だろう。でもこの時、殿下と侯爵令息は血塗れのヘンド

リックさまの姿を見て大いに安堵する。いや、それだけでない。一種の神々しさすら感じていた。

こうして未遂に終わった王太子暗殺計画は、後に異母弟である第二王子の派閥の者による企てだったと判明する。

首謀者は第二王子の婚約者の家の当主と、王子の母である側妃の兄。彼らが手を組み、野心に走った末の愚行であった。

王太子殿下は襲撃の三年前に妃を迎えており、昨年に子——王位継承権を持つ男児が生まれている。

それを踏まえ、国王陛下は王太子殿下に生前譲位を決定。健康なうちに次代に譲り、数年かけて統治体制を盤石なものにするという考えによるものだった。

今回の王太子殿下の視察旅行は、通常の視察というより、次期国王となる彼の立場を国民に明確に示す意図で計画されたものだった。

これに焦ったのが第二王子の派閥。

このまま王太子が正式に王位を継承してしまえば、そしてさらに子が生まれていくなれば、第二王子の王位継承順位はますます下がり、王座はどんどん遠のいてしまう。

ならば継承式の前に事を起こせと、浅慮のうちに第二王子派が暴走した結果、起きたのが今回のラウレンツォ王太子殿下暗殺未遂事件であった。

遠征訓練地の騎士たちに半日程度で回復するしびれ毒を使ったのは、国内の戦力低下を防ぐため。殺さずただ一時的に戦闘不能にする方法を取ることで、第二王子が王座に就く際、騎士団の反発を

最小限に抑える目的もあった。結局、失敗したけれど。

一時期は隣国の関与も噂されたこの暗殺未遂事件だが、国王陛下は関係者それぞれに厳しい罰を下していく。

特に側妃の生家と第二王子の婚約者の家は罪が大変に重いと、一族滅門の沙汰が下る。

第二王子派は大きく数を減らし、影響力を失う。

逆に王家の権力は大いに強化された。

この結末に満足した国王陛下は、王太子殿下の暗殺を未然に防いだ功労者、ヘンドリックさまの働きを高く評価し、賞賛の言葉をかけ、報奨金を与えた。

さらに王都の公共広場に使者を送り、集まった民の面前で、ヘンドリックさまの功績を語って聞かせた。しかも、それは何度も行われた。

こうして、若き英雄ヘンドリック・バームガウラスの名と功績は、社交界のみならず、市井にも広まっていく。

果ては吟遊詩人の唄にまでなり、王都や各地方都市の街々で、英雄譚として歌われることになるのだ。

「ただの憧れで終わっていたらよかったのかしら……。それとも、私とヘンドリックさまは、出会ったことがそもそもの間違いだったの……？」

この日、私はどうにも寝つけず、起きて日記でも書こうかしらとペンを手にとっていた。

でも、あちらこちらに思考が飛んで、結局長く物思いに耽るだけで終わってしまう。気づけば、ほんの少し文章を書き始めただけで、手を止めたまま、既にかんりの時間が経過していた。

私は手にしていたペンをペン立てに戻し、椅子の背もたれに体を預け、深く息を吐く。

あの事件が起きた当時、私はまだ十二歳。

騎士の役目や働きについて、きちんと理解してはいなかったけれど、王太子殿下のお命を救う行為がいかにすごいことかは感じ取っていたと思う。

だって、何度も何度も様々な場所で、ヘンドリックさまのお名前を耳にすることになったから。

若き英雄、ヘンドリック・バームガウラスはまさに雲の上の人と云っていい存在。

その名前を聞いたたび、一体どんな方かしらとあれこれ想像を膨らませた。

まさか数年後、そのヘンドリックさまに救われる未来が待っているなんて思いもせず、まして、

私とその姿に一目で恋に落ち、後に妻になるなど、想像だにしていなかった。

ヘンドリックさまの役に立ちたいと勝手に意気込んで妻になった。

なのに、一度目の人生ではヘンドリックさまの剣を背に受けて命を落とし、二度目は今日、離縁という形で関係は終わっている。

——もししたら、私たちは出会ってはいけなかったのだろうか。

もう何度も頭に浮かんで、そのたびに打ち消してきた問い。

悩んで、心の奥を探って、自分なりの答えを出すけれど、それでも、まるで呪いのように繰り返して浮かんできては私を悩ませる問いが、またしても頭をもたげ、私の心を震わせる。

——あの日の出会いこそが、間違いだったとしたら。

そう、最初から私たちが出会わなければ、そもそも何も——

「……いいえ、違う。違うわ」

私はゆるゆると首を横に振り、自分に言い聞かせるように否定の言葉を口にする。

感傷に浸って、大事なことを忘れてはいけない。

私はそつと目を瞑る。

眼裏に浮かぶのは、私の大切に愛しい存在。

ヘンドリックさまと同じ漆黒の髪と、紅玉ルビーのような赤い瞳の。

生まれた時は触ったら今にも壊れそうなくらいにふにやふにやで、真っ赤な顔はしわくちやで。

少し大きくなると、ほっぺがぶくぶくと、あどけない笑顔が可愛らしくて。

成長するにつれ、賢く、頼もしく、優しいしっかり者の少年になっていった。

一度目の人生では、道を踏み外した私の心と呼び戻し、二度目の人生で私に幸せの意味を教えてくれた大切な息子、ランスロット。

——そうよ。あの子は、あの子だけは、と、そう思ったの。

どうしても、あの子にこの世界に生まれてきてほしかった。

私よりずっと、二度目の人生を与えられるべき子だと思った。あの子こそ、生きるべきだと。

自己憐憫に陥ってあの子を守り損なった一度目の私なんかより、最初から大切なものを間違えなかったあの子のほうがずっと、生きるべき存在だと思ったから。



でも、二度目の人生が始まった時、あの子はまだこの世界のどこにもいなかった。
そう、まだ。

「……ヘンドリックさまがいなかったら、今の私はなかった。貴族の娘が人身売買の集団に捕ま
て、無事でいられるはずがないもの。売られるか穢されるか……絶対にひどい目に遭っていたわ。
もしかしたらどこかで野垂れ死んでいたかもしれない……」

ヘンドリックさまが私の未来をつないでくれたのは事実。それと私が彼に愛されなかったことを、
混同してはならない。

「……最後まで嫌われたままだったけれど、ヘンドリックさまと出会ったことそのものは間違いで
はないはずよ。だって……ヘンドリックさまと結婚していなかったら、ランスは生まれていなかっ
た。あの子に会える未来はなかったのだから」

——だから、ヘンドリックさまとの出会いが間違いであるはずがないわ……

私室でひとり、私はそう呟いた。

第二章 白の世界のヘンドリック

「ふむ」

俺——ヘンドリックがじっと水面を見つめる横で、灰色のローブの男が小さな声で呟き、立ち上がる。

俺の視線の先にあるのは、もともとは小さな川だ、ったもの。

けれど流れの止まった今、それは波ひとつ立たず、ただ平らかに滑らかに、まるで水晶のように透き通っている。

水面より鏡面という言葉がびつたりのそれは、ローブの男によると『水鏡』と言らしい。

そうしてその水鏡は、俺の前でラシエルの姿を映し出した。

ラシエルは、日記を書こうとペンを手にとったところだった。

しかしほんの数行書いて、ペンを持つ手が止まる。何やら思考に耽り始めたようだ。

黙ってじっと見ていると、何を思ったのか、ラシエルが小さく苦笑した。途端、くると水面の映すものが変わる。

こういう原理なのだろう、孤児院でラシエルを攫おうとした破落戸を俺が倒す光景が、水鏡に見える。

少女のラシエルが、頬を染めて、俺の後ろ姿を見つめている。知らなかった、あんな顔をしているのか。

ペンを持つラシエルが、遠い眼差しで椅子の背もたれに寄りかかり、少し上を見上げる。すると水鏡の映すものは、王太子襲撃事件の時の俺に変わった。

その次は、俺が国王陛下から英雄の称号を受ける場面に。

かと思えば、広場で吟遊詩人が英雄の戦いぶりを称える唄を歌う光景に変わる。

——もしやこれらは、ラシエルが思い浮かべる心の中の光景なのだろうか。それらも、同時に映し出されているということか？

それから、物思いに耽るラシエルの表情に呼応するように、水鏡が映すものは時に長く、時に短く、ころころと場面を変えていく。

俺は、そんな水鏡から目が離せず、じっと目を凝らした。

ラシエルが、花開くようにふわりと美しく微笑む。それを合図にしたかのように、黒髪の赤子が生まれる場面が変わる。

腕に赤子を抱くラシエルが、やっと会えたと泣いている。

不思議な気分だ。ラシエルが眉尻を下げたり眉間に皺を寄せたり、軽く微笑を浮かべたり遠い目をしたたり。一度は妻だったはずなのに、あのようにくると表情が変わる様を俺は見ることがない。

そう思ってから、それもそうか、と俺は思い直した。

当たり前だ。考えてみれば、これまでこうも長く、そして真つすぐにラシエルを見たことが、そもそもない。

仮にも十三年も夫婦であったというのに、俺とラシエルが共に過ごした日など一日もないのだ。だからだろうか。水鏡みずかがみの向こうに当たり前のようにラシエルの姿があることが、なんとも奇妙で、不可思議で、居心地が悪く、心の中がざわざわと落ち着かない。

一番訳が分からないのは、それでもなぜか水鏡みずかがみから目を離す気にならないことだ。

ローブの男が立ち上がった後も、俺はまだ座り込んだまま、じつとラシエルの姿を映す水鏡みずかがみを見つめ続けている。

一体どうしてなのだろう。

なぜ、こうもこの場を離れがたく感じるのだろう。

ラシエルが視界に入るだけで不愉快でたまらなかつたはずなのに、なぜ俺はこのままずっとここにこうしていたいと思っているのだろう。

矛盾している、俺はあの女が大嫌いだつたはず。

なのに、どうして――

突然、水鏡みずかがみの表面がゆらりと揺れ始めた。映し出されていたラシエルの姿も同じく揺れて、ゆらゆらゆらゆら、奇妙に歪む。

そうして、ゆっくりとラシエルの姿は消えていき、水鏡みずかがみはやがてただの水面に戻る。

「……つ」

「よかったな」

水鏡みずかがみが消え、息を呑む俺に、ローブの男が横から呑気に声をかけてくる。

俺がぎろりと睨むような視線を向けると、ローブの男は軽く肩を竦め、こともなげに言った。

「なんだ、よかったと思わないのか？ お前との出会いは間違いじゃないって、そう言っていただろう」

「……」

ローブの男のにやついた顔が癪に障り、俺は返事を返さずにいた。そのまま、先ほどまで水鏡みずかがみだったものの視線を戻す。

今は小川に戻り、ちよろちよろと微かな音を立てて水が流れている。

どこからどう見てもただの小川でしかないそこに、もうあの女の姿はない。どこにも――いない。だが、ローブの男の言葉に間違いはなく、確かにラシエルは言った。

俺との出会いが間違いのはずがないと。

それでランスロットが生まれたからと。

しかし俺は、ローブの男が言うようには喜べなかつた。

それを、よかったと言うのか……？ 本当に？

何かが気になるのだ。頭の中で、何かが俺を苛立たせる。

いや、今はそんなことより。

俺は思考を振り払うように、川の水面を指でさす。

「……それより、あれはどうなった。あれの姿がいきなり消えて、何も見えなくなっちゃったぞ」

ローブの男は呆れた視線を俺に向ける。

「今日はもう終わりだ。放っておいたら、こうも長くぼーっと見続けるとは、呆れてものも言えない」

「……そんなに長かったか？」

「ああ。あちらの世界で言うならば、ゆうに七刻は経っていただろうな。水鏡みずかがみが映すものが何度も変わっただろう？ あれはラシエルの思考があちこちに飛んだからだ。中にはずいぶん長いものもあったが、お前はそれを真面目にじっと見続けた」

「……そうか、そんなに見ていたとは気づかなかった」

「そうだな、お前はそういう奴だった。任せた私が馬鹿だったよ。ということで、明日からは私が見る時間を区切る。いいか、私が終わりと言ったら水鏡みずかがみは終わりだ」

ローブの男の偉そうな言い方に少しばかり腹が立つが、ここはこの男の世界。

一体どうやっているのかは知らないが、俺はこの男に呼ばれてここにいる。間違いなく俺のほうが格下だろう。

騎士団で言うなら、ローブの男が騎士団長で、俺は騎士団員。ならば上からの指示は絶対だ。

「……お前が終わりと言ったら終わるのだな。了解した」

「おや、やけに素直だな」

「この世界に住む以上、お前の言うことは聞かねばなるまい」

俺の言葉に、ローブの男が首をかしげる。

「物分かりがいい上に、機嫌も悪くなさそうだな。なるほど、そんなに水鏡みずかがみが気に入ったか」

「……まあ、今日見たものは、なかなか悪くなかった」

「ほう」

灰色のローブの男が、またしてもにやりと笑う。何もかも分かったような顔でこちらを見るのが、どうにも気に障る。

「そうか、なかなか悪くなかったか。それは、久しぶりにあの子を見たからか？ それとも、あの子がお前の功績を思い返していたからか？」

「……は？」

目を瞬かせる俺を気にするふうもなく、ローブの男は言葉を続ける。

「あるいは、お前との出会いを結局は不可欠なものとしてラシエルが結論づけたからか。どっちにしろ、全部ラシエル絡みだなあ。まあ、どうせお前のことだから、いつもの斜め上の感覚頼りで、本当のところは何も分かっちゃいないんだろうか」

——この男は、何を言っている？

「……お前は意味の分からないことばかり口にする」

「ふむ、まだそのくらいの認識か。まあ仕方ない」

ローブの男は、軽く肩を竦めてひとり納得すると、俺の問いに答えないまま再び口を開く。

「ヘンドリック。お前はこれから先、水鏡みずかがみを通してどれだけの世界を見れば、気づくんだろうな。どれくらいの時間をかければ、お前のその心のひびは塞がるんだろうか」

腹が立つ。この男は、俺が聞いても答えを返さない。それどころか、さらに問いを重ねていかれては、ますます訳が分からなくなってしまうのではないか。

無言で睨みつける俺に、ロープの男は続ける。

「まあいい。まだ始まったばかりだ」

そう言って、男は身を翻すひるがえ。

灰色のロープが、ふわりと風で舞い上がる。

その後ろ姿を見て、俺は、この『白の世界』に初めて来た日を思い出した。



ぐらり、と大岩が崖の上から落ちてくる。

ゆっくりと大岩は転がり落ちる。

同時に落ちてくる小さな岩や石の欠片まで、俺の目は鮮明に捉えている。

けれど、俺は動かなかった。

動けないのではない、避けようと思えば、大岩くらい避けられる。ただ、動く気にならないだけ。

俺はそのまま崖の下に立ち尽くし、ただそれが身を潰す瞬間を待った。

これで終わりだ、ようやく終われるのだと、なぜか安堵を覚えて目を瞑る。ついに訪れた救済を噛みしめる俺の脳裏に、あの女のアザが浮かぶ。

次の瞬間、俺は白の世界にいた。

すべてが真っ白で、俺以外に何もない世界に。

現状把握ができず固まる俺の前に、ペリりと壁をはがすように何もない空間から現れたのが、灰色のロープを着た不思議な男だった。その男が、俺をこの世界に引き入れたようだった。

男は言った。

俺の心にはひびが入っていると。

そして既に俺は二度、ヘンドリックとして生きていて、一度目の人生では妻を切り殺すようなどうしようもない男だったけれど、二度目の生は少しましで、俺の心のひびとやらも、ほんの少しだけ塞がっていたのだと。

その心のひびとやらが、俺にどう影響しているのかは知らないが、ロープの男は、この状態のまま生まれ直しても、結局また似たような人生を送るだけだろうと言う。

「似たような人生……」

大岩に体が潰される直前に感じた安堵が、ずるずると抜け落ちていく。

何をしてもしつらなく、無意味に思えた俺の人生が、ようやく終わると思った。

なのに、目の前にいる男に否定されてしまった。心のひびとやらのせいで、これから、たとえば新たな生を受けても似た人生が続くだろうと。

「まだ、いや、また続く……？ あれと似たようなものが……？」
俺の呟きに、ローブの男は「そうだ」と頷きを返す。

「このままでは、新たな人間となつても続くぞ。お前の、間違いだらけの人生がな」

——間違いだらけの、人生……

「……はっ、なんとも言い得て妙ではないか」

呆れか、諦念か。俺の口から自分に対して冷笑が零れる。

自分の人生だ。間違えばかりなのは知っている。

だが、好きで間違えていた訳じゃない。

間違えてもそれに気づかず、教えられても上手いかず、気がつけば挽回するより先に、また別の間違いを犯している。

誰かの真似をしようと意味がない。見聞きした通りにしたつもりでも、どこか微妙に違うらしく、時に少しの時間稼ぎにはなつても、結局は不正解で終わる。学問や音楽、剣術ができて、生きることは上手くできない。

それが俺だ、ヘンドリック・バームガウスという人間。

間違えずに済むならば、人生はきつとも楽なのだろう。

絶対に間違えない人間はいない。分かっている。誰もがなんらかの間違いを犯すものだ。それでも犯す間違いの数に多い少ないは存在していて。

それが少ない人生ならば、さぞや生きやすいことだろうと、何度となく俺は思ったのだ。

学問のように生き方も正誤を簡単にさせたら楽なのに、俺はなぜか選択を間違える。だから目の前にいる不思議な男に、きつとこの先も間違いだらけの人生を送り続けると言われるのだろう。

間違いだらけと言われても腹は立たない。俺自身、さもありなんと、思うから。

根拠などない。経験則で知っている。

そう、分かっている、身に染みているのだ。

俺が気づくのは、いつだって間違えた後。

だから、これも経験から分かっている。どうせ何をしても無駄なのだ。

ローブの男は、そんな俺の思考を見透かしたかのように言う。

「まあ、無理強いはいしない。決めるのはお前だ。好きなだけここにいていいし、嫌になったらいつでも帰してやろう」

ローブの男の言葉に、俺は尋ねる。

「ここにいる意味はあるのか？」

「そうだな。ここにいる間は、生まれ直しに入らなくて済む。お前はもう死んでいるから、あつちに戻ったらすぐ生まれ直すことになる」

「死んでいるのなら、なぜ今ここで、俺は生きている？」

「生きているって訳でもないんだ。ここは時が止まっている。だから中途半端な状態のお前でも、そのカタチを保っていられるって訳だ」

「カタチ……？」

「ああ、私が作った偽の容れ物だ」

俺は自分の体のあちこちを見回す。どこをどう見ても、いつもの俺の体に見えるが、これが偽物だと言うのか。

俺は、向かい合うように立つローブの男を見つめて問う。

「……お前も死んでいののか？ それとも、お前は神か、死神なのか？」

「ははっ」

俺の質問にローブの男が笑う。これまでののにやにやした笑いではなく、つつい漏らした苦笑い。「残念ながら、私はちょっと特殊な魔法が使えるだけの、ただの人間だ。ここにいるせいで、だいぶ長生きしているがな」

「……そうか」

魔法など古代の話、とうの昔に絶えたと聞いている。それが使えるというこの男を、『ただの人間』と呼ぶのは正しいのか？ いや、魔法が使えるというのなら、いつそ俺を……

「……お前のその特殊な魔法の力で、俺を消滅させることはできないか？」

死ではこのどうしようもない焦りと後悔の連鎖から逃げられないと言うのなら、いつそ消え失せてしまうのもいいと思った。

だが、ローブの男は首を横に振る。

「あまり無茶を言うな。それに結論を急ぐな。ゆっくり考えろ。時は止まっているんだ。変な言い方だが、考える時間はどれだけでもある」

それから、ローブの男は説明した。

この世界には、もともと真っ白で何も無いこと。

ローブの男が望むものはなんでも出せるが、それらはすべて幻であること。

「要は、本当は何もないのに、あるつもりで過ごしているだけだ」

それから、少々意地の悪い笑みを浮かべて俺に言う。

「だからな、もしお前が私に鍛錬場がほしいと言うなら、出してやれるぞ」

俺は眉を顰める。

嫌がらせか？ 俺が一度目の人生でラシエルを切り殺したと教えたのはお前だろうに。

「……剣は、もう持たない」

「そうかい」

少し低い声で答えれば、ローブの男は顎に手を当て、にやりと笑った。

「どうしてだ？」

「……剣を持てば、誰かを切ることになる。それが常に正しければよかったが、どうやら俺はそこでも間違えたらしいからな」

——本当に、間違いだらけの人生というのは言い得て妙、俺にぴったりの言葉だ。

ローブの男は小さく肩を竦めた後、俺が二度目の人生で、何度か剣を持つことに躊躇する瞬間があったと言った。

一度目の人生を覚えているはずがないのに、そんなことが起きたのは、なかなかすごいのだと男

は説明するが、やはり俺には意味が分からない。

覚えていようと覚えていまいと、俺はあれを殺したのだろう。

ならば、その事実は変わらないではないか。

それでは結局、駄目ではないか。

なんでも出してやると言うローブの男に、俺は太陽と月と星、それからその日の気分で山や川や草原を頼む。

山を走り回り、川に飛び込んで魚を獲り、海では行けるところまで泳いでみた。草原では馬も出してもらい、好きなように走らせていたら三日ほど経っていた。と言っても、時間が止まっているこの世界で、そう見えているだけだが。

俺は死んでいる上に、すべてが幻のこの世界では、食事の不浄の必要もない。だから、三日どころか三年飛び出したままでもなんの問題も起きないのだろう。

ただ、食べなくても構わないということは、逆に言えば食べても構わないということ。

ローブの男は、幻で作り上げた食事を出しては、気分次第で俺を誘う。

幻でもきちんと味も香りもついていて、食べた後はちゃんと満腹感があるから不思議な話だ。

人付き合いが不得手な俺にとって、ローブの男以外誰もいないこの世界は、存外楽であることにやがて気づく。

たぶんこれまでの人生で一番と言っていいくらい楽である。なのに、なぜかローブの男は時々、

同情めいた視線を俺に向けるのだった。

そうしてある時、ローブの男は言った。

「あっちの世界を見せてやろう」

これでいいかと呟いて、ローブの男は小川に両手を向ける。ちよろちよろ流れる小川の水が――正確に言うとき水に見えていたものが――一瞬、眩い光を放つ。

光が収まると、小川の水は、鏡のように固く平らになつて。

その一部がゆらりと揺らぎ、揺らいだ後に人影を映し出し。

水面の一部、透明となった箇所に向かってラシエルがいた。

水鏡なるものを通して俺があちらの世界を見る日々は、この時から始まった。

第三章 兄と弟

次に水鏡が映し出したのは、黒髪と、朱色の髪の男児のふたり。

背が高い黒髪は、六歳くらい。朱色の髪のほうはもつと小さく、三歳くらいだ。どちらの男児の顔も見覚えがある。記憶に刻み込まれた顔だ、忘れない。

黒髪の子は俺だ。幼い頃、鏡でいつも対面していた俺の顔。

そして朱色の髪の男児も、俺にとっては見慣れた顔だ。うっとうしいくらいにいつも俺の後ろを付いて回っていた弟、キンバリーの幼い頃の顔だったから。

「あにーえ」

記憶にある通りの朱色の髪の男児が、まだ覚束ない足取りで黒髪の男児——幼い俺の後を追う。

あにーえ、あにーえと舌足らずの口調で俺に呼びかけながら。

これはきつと、おそらく微笑ましい光景なのだろう。現に、父上も母上も、それから使用人たちも、皆にこのことその様子を見守っている。

その中において、唯一笑っていないのは俺だけだ。

それはそうだ。俺は誰かと一緒にいるより、ひとりでいるほうが、よほど楽に思うから。

特に、弟のキンバリーは苦手だった。

ずつと——そう、ずつとだ。

生まれた時から、いや違う、きつとキンバリーが言葉を喋るようになって、ああこいつは誰とも普通にやっていけるんだと分かった時から、俺はキンバリーが苦手だった。

よちよちと後ろをついてくる弟は、いくら無視を決め込んでもずつと追いかけてくる。

煩わしい、一緒にいたくない。俺は不機嫌を隠しめせず、睨みつけるようにキンバリーを見下ろす。それなのにキンバリーは、俺を見上げて、にぱつと笑いかけるだけ。

ろくに言葉が通じない、笑顔ですべてを押し切るキンバリーは、俺にとつてとても面倒な存在だった。

仏頂面で対応しているのに、キンバリーは気にもしない。周囲も、なぜか微笑ましいと喜ぶだけで、誰も俺から離そうとしない。

苛立ちのままに、池に落としたことがある。

いや、正確に言えば落とした訳ではない。後ろからくつついてくる弟が邪魔で強く押したら、よろけて庭の池に勝手に落っこちたのだ。

だが何事も結果がすべて。俺が押したら弟が池に落ちた、それが実際に起きたこと。

だから、使用人たちが両親に上げた報告は、なんら間違っていないのだろう。報告を聞いた父上から、俺はたくさん叱られた。母上は泣いた。

弟は可愛がるものだと、大切にしないと、二度と池に突き落としてはいけないと、何度も何度

も諭された。別にしつこく言わなくても、一度聞けば分かるのに。

「よいか、ヘンドリック」

父上は、俺の肩に手を置き、重々しく口を開いた。

「力とは正しく行使せねばならん。自分より弱い者を守るため、自分を守る力を持たない者を庇護するために使うのだ。お前は力が強く、体つきもしっかりしている。そんなお前よりも小さく、力もない弟は、お前が守るべき者のひとりなのだ。大切に、優しく接してあげなさい」

眉を下げた母上が、父上の言葉の後に続ける。

「ヘンドリック。キンバリーはお兄ちゃんのあなたが大好きなの。側に行っても、乱暴しては駄目なのよ」

なるほど、と俺は思った。

キンバリーは弟だから大切にしなければいけない。兄である俺は、キンバリーを守り、優しく接しなければいけないのだ。

それからは、懲りずに俺の姿を見つけると追いかけてくる弟を決して拒まず、勝手に付いて回らせるようにした。

あれはいつだったろうか。そう、確か俺が七歳の時だ。

目の前で小石に躓いたキンバリーを、地面に滑り込んで俺が受け止めたことがある。

馬を見に行こうと厩舎に向かっていた時だった。

「お前の乗馬訓練用の馬を買ったから、後で見るといい」

そう朝食の席で父上に言われ、授業の合間に見ておこうと外に出た。

そうしたら、例によってキンバリーが後ろから追いかけて来た。そして小石に躓いた。

キンバリーの俺を呼ぶ声に気がついて、ちよ、と振り向いた時だった。

躓いてバランスを崩す弟を見て、またかと思うと同時に、ちよ、という言葉が頭に浮かんだ。俺は両手を広げながら、弟に向かって滑り込む。

キンバリーは鈍くさい。だから、俺の後を付いて回っていると、よく勝手に転んだり何かにぶつかったりして、いつの間にか擦り傷や小さなたんこぶをこしらえている。

それで泣かないところは煩わしくなくていいのだが、以前、両親から兄として弟を守れと言われた身としては、気がついたらキンバリーが怪我しているという状況に少々頭を悩ませていた。

後ろにも目があれば簡単に見張れるが、残念ながら、目は前にしかついていない。

かと言って、いつも後ろ向きに歩く訳にもいかない。転ぶなら目の前で転べ、とキンバリーを叱ろうかと思っていた矢先の出来事だった。

あにうえ、と呼びかけ、ちよ、と俺が振り向いた直後に石に躓くとは、キンバリーにしては珍しくちゃんとしているではないか。

そんなことを考えながら、俺は倒れ込む弟の体を受け止めた。

膝と脛に熱と痛みが走り、体にどすと衝撃が来る。腹の辺りが重くて苦しい。

「坊ちゃま！」

後ろからキンバリーを追いかけてきた乳母の焦る声が聞こえた。
だが、俺の上にはキンバリーが乗っかっているからよく見えない。

「大丈夫か」

俺が声をかけると、キンバリーがそろそろと起き上がった。

よほどびっくりしたのか、目を丸くするばかりで声を出さない。俺の問いに、ただこくこくと頷いている。

体を感じていた重みが、ふっと消える。

乳母がキンバリーの両脇に手を入れ、持ち上げて横に立たせたようだ。俺は、兄としての務めを果たせたことに満足しながら体を起こす。

「ヘンドリックさま、大丈夫ですか、お怪我は……っ？」

キンバリーの乳母が、慌てた様子で俺に尋ねる。

「大丈夫だ。キンバリーに怪我はないか」

「はい。ヘンドリックさまのお陰で無事でございます」

「それならいい」

「そんな……っ、よくありません。ヘンドリックさまに受け止めていただくなんて、本当に申し訳ございませんでした。キンバリー坊ちゃまをお守りくださり、ありがとうございます」

「これも兄の務めだ。当然のことだ」

そう言って立ち上がると、ずきりと膝の辺りに痛みが走る。

目を下にやれば、ズボンの左足部分が大きく破けている。どうやら勢いよく滑り込みすぎたようだ。布の破れ目の向こうに見える膝から、血がたらたらと流れている。

無表情で傷を眺める俺とは対照的に、乳母とキンバリーが怪我に気づいてひどく慌て始めた。

ズボンは破れたし、膝は痛むし、多少は足を引きずるが、別に歩けない訳でもない。

血だって、いつかは止まる。なのに、キンバリーの乳母は顔色を失い、医師を呼んでくると言うなり走り出してしまふ。

置いていかれたキンバリーは、出血している俺の膝を見つめ、ぽろぽろと涙を零す。

「あ、あにうえ……あにうえが、けがしちゃった……ごめんなさい。あにうえ。ごめんなさい……」

泣かれるのは困る。弟を泣かせてはいけなないと、前に両親から教えられた。

泣き止ませねばならないが、どうすればいいか分からない。

俺は泣いたことがないから、泣く心理も、泣き止ませる方法も知らないのだ。

大体、怪我をしたのは俺だろう。なのに、どうしてキンバリーが泣くのだ。

理不尽な状況に、だんだんと腹が立つてくる。

「おい、泣くな。傷なら医師に診てもらえば済む話だ。それに、兄が弟を助けるのは当たり前だろっ」

面倒極まりない。早く泣き止め。うるさいから黙れ。そして、別の場所にさっさと行ってしまえ。そう思いながら、話を終わらせようと口にした言葉に、なぜかキンバリーが反応してさらに涙を流す。一体どこに泣く要素があったのか。

「うう……っ、あにうえ、ありがとうございます……っ」

困った、キンバリーの思考がまったく理解できない。

「あにうえはやさしいです。ごめんなさい、ぼくがころんじやったから……」

「……そうだな」

それは否定しない。この傷はお前が転んだからできたのだ。

「キンバリー。お前は鈍くさい。慌てて走るから転ぶし、物にぶつかるのだ。もっと周囲に気を配り、危険物がないか常に気をつけろ」

「はい……きをつけます……」

キンバリーはこの世の終わりのような悲愴な顔で、何度も俺に謝り、感謝する。

だが、正直なところ、泣き止んでくれさえすれば、謝罪なんてどうでもいい。

弟は守るもの。大切にすることも。

俺はただ、両親に言いつけられた兄の務めを果たしただけ。

キンバリーの乳母が、医師や下男や下女を連れて戻ってきた。少し遅れて母上も。

屋敷内では、予定していた授業の中止連絡を執事が、侍女は俺が休めるようベッドを急ぎ整えているという。

それを聞いて、この後も予定通りに動くつもりでいた俺は驚いた。初めて怪我をしたせいか、周りがずいぶんと大袈裟な反応をする。

医師が破けたズボンを鉄で切り、怪我の様子を診る。膝の擦り傷は、深くはないものの範囲が

広い。

医師が丁寧に消毒し、薬を塗って包帯を巻いていく。その間、心配性のキンバリーはぐずぐず泣きながらも俺の側から離れず、小さな声でむにやむにや何か唱えている。

「何を言っている？ キンバリー」

「おまじないです。はやくなおりますようにって」

キンバリーが怪我をした時に、乳母がいつも口にするまじないの言葉なんだとか。これを唱えれば傷が早く治るのだとキンバリーが胸を張る。

「……キンバリー、呪文を唱えても、傷の治りには関係ない。無駄な行動はするな」

無意味な行為を窘めても、キンバリーはまじないを繰り返して唱える。なぜか周囲にいる者たちもキンバリーを止めようとしない。

医師でさえもだ。意味が分からない。

挙句、心配の塊と化したキンバリーが、怪我をした兄上のお手伝いをすると言い出す。

俺から離れようとせず、茶やら菓子やらを持ってきたり、歩く俺に肩を貸そうとしたり、俺が読み終えた本を図書室に戻しに行ったりと、使用人のような真似をし始める。

邪魔だと言っても気にしない。そうして時折、俺の膝の怪我に向かって例のまじないを口にするのだ。心底、辟易した。

俺は『ちようにいい』から滑り込んで受け止めただけ。

そうするのが『兄の役目』で、それが『正しい』ことだから。

立ち読みサンプル はここまで

決してキンバリーのためにしたのではない。

役目を果たして清々したのに、キンバリーが申し訳なさそうにしているのがどうにも腑に落ちないが、これ以上は考えても無駄だと諦めた。

その後、母上から、そして仕事から戻った父上からたいそう褒められた。

立派な行動を誇りに思う、でも無駄はしないでくれと、俺の頭を撫でながら父上も母上も言う。

前に弟を池に落として叱られた俺が、今回は怪我をしてまで弟を守った。それを両親は、俺が成長した証と喜ぶ。

別にそういうつもりではなかったが、上手く説明できる気がせず、そのまま何も言わなかった。

膝の傷は、一週間で治った。

完治と同時に、キンバリーのまじない攻撃も終わった。ようやく周囲が静かになって、俺はひどく安堵した。

俺の前でキンバリーがまじないを唱えたのは、この一度きり。

俺が怪我をすること自体そうないというのもある。だが、この時四歳だったキンバリーが、やがて大きくなり、怪我をしてもまじないなどに頼らなくなったという理由もあるだろう。

だが俺は、今はもちろん、七歳だったあの時ですら、俺の怪我のためにキンバリーがまじないを唱えた意味が理解できずにいた。

ただの言葉の羅列、早く治るようにと口先だけで願う行為。効力がある訳でもなく、単なる気休め、自己満足でしかない。

治ってほしいという気持ちの表れであるだろうことは、流石に理解している。

しかし、俺なら絶対にやらないし、やろうとも思わない。

誰が怪我をしても、たとえばそれが父上や母上でも、そんな不確かなものに頼ろうとは思わない。無意味な言葉を唱える意義も、回復を願う言葉を口にしただけで治る、もう大丈夫だと根拠なく安堵できる心境も、俺には理解しがたいもの。そんな、時間と労力の無駄でしかない行動など何の役にも……

——ああ、だが、父上と母上は喜んでいたな。

ふと、思い出す。

誤って刺繍針を指に刺した母上を見て、キンバリーがその手を取って、もごもごと呟いた。

鍛錬で手に擦り傷を作って帰った父上に、キンバリーが駆け寄って小声で唱えていた。

覚えている、ふたりとも嬉しそうに笑っていた。

「そうか……」

たぶんこれもそうなのだ。

キンバリーには自然にできて、俺にはどれだけ考えても絶対に理解できないもの。

きつとこれも、俺とキンバリーが違う理由のひとつなのだろう。

水鏡みずかがみを見ながら、俺はそう思った。